

昔から農家や地域で大切に守られてきた多くの伝統農産物や特産農産物等を皆さんに知ってもらい地域農業の振興に役立ててもらうため、平成28年度にマップを作成しました。(No.36農委だより)特集で農産物等を紹介していきたいと思います。今回は“但東のシルク野菜”と“丹波黒大豆”です。

但東のシルク野菜

但東地域には、地域特産のシルクコーン・シルクナス・ツタンカーメンのえんどうがあります。

平成十一年、但東シルクロード観光協会の発足を機に、他にない珍しいものを探す中で、この三つが生まれました。当時、マスコミで大きく取り上げられたことから、但東を全国にPRしたものです。

平成十七年からJAが受け継ぎ、但東シルク野菜部会が会員二十二名で発足しました。ピーク時には、売り上げが一人当たり年間四〇〇万円程度ありましたが、生産者の高齢化により、現在では大きく減少して



います。栽培上の課題は、シルクナスでは傷付き防止のための袋かけが大変なこと、シルクコーンでは、他品種との交配防止、ツタンカーメンのえんどうでは、普通のえんどうとの交配で莢の色が緑になってしまうことなどがあります。

地域おこしの一環として「シルク」を冠した特産品で、大規模な産地化を目指したものではありませんが、収穫時期になると、毎年マスコミにも取り上げられ、また近年、新規就農した若い専業農家も加わって、但東のシルク野菜は頑張っています。

(農業委員 森井 脩)

丹波黒大豆枝豆、ビールの友に最適

丹波黒大豆は、日高地域では昭和の終わり頃から平成にかけて、転作作物として取り組まれて、盛んに栽培されてきました。近年では、米の需給調整制度の見直し、耕作者の高齢化、天候不順による収穫量の減少などの理由で、稲作に転換されていきました。

JAたじま日高営農生活センターの河原さんに日高地区の様子をお聞きすると、名色地区の辻野吉昭さんが、今年二年目で約一ヘクタール栽培されており、枝豆として農協などに出荷・販売されているそうです。丹波黒大豆は、若い莢の時は、枝豆として、枝豆は、十月中旬頃から二週間ぐらいが食べごろです。十一月から十二月にかけて収穫するものは、正月のおせちの定番として食べられています。

また、枝豆の走りの時期は青く、熟すと段々と黒くなつてきます。枝豆で食べる際は、収穫後、

早めに茹でて食べられることをお勧めします。

収穫してから日が経った莢のものと食べ比べると味が断然違います。これは自家菜園の強みでしょうか。

おいしい食べ方
① 莢の両端を切る。(茹でる時間も短く、塩味が中まで染み込みます。)

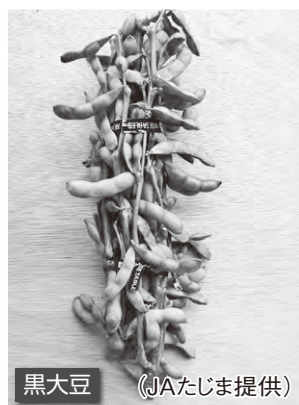
② 枝豆は水洗いし、たっぷりの塩でこすり合わせ、うぶ毛もきれいに取り除く。

③ 鍋にたっぷりのお湯を沸かし、塩がついたままの豆を入れ、アクを取りながら茹でる。

枝豆シーズンが始まるとザルにいったい茹でますが、食べ始めると手が止まらず、すぐに莢だけになります。

皆さんも是非お試しください。

(農業委員 上坂 光広)



地域の若い担い手として

清水 浩次さん(31歳)



「農業を営む父親の影響もあった。」という清水さん。いずれは農業をやりたいと考え、農業関係の高校から大学の農学部へ進み、農業全般の基礎を学んできました。

卒業後は、社会経験も必要との思いから一般企業へ就職。会社員として4年間、働きました。

「本格的に農業と向き合おうと考えていた時、豊岡農業スクールのことを知り、迷わず入校しました。2年間農業生産法人で65haもの大規模な水田を中心に実践的に学ぶことができた。」と話してくれました。

この春、農業スクールを卒業し、父親とともに気比地区の水田5.5haで、コシヒカリを中心に営農を開始。連休明けには田植えも終わりました。気比の水田は、「じる田」(湿田)が多く、面積が比較的狭く、点在するほ場を覚えることに苦労しました。また、獣害の被害防止の電気柵や雑草の管理も大変な作業です。

5月には、認定新規就農者となり、今後は認定農業者も目指し、新しい作業場を建設中です。

「今は、水田ですが、キャベツやハクサイ等の畑作、冬季には、ハウスを利用し、シュンギクやホウレンソウ等の葉物野菜にも取り組みたい。」と希望を語ってくれました。

港地区の担い手として、地域からも大きく期待されています。

(農業委員 高尾 利美)

「後世へ残そう、豊かな大地」

下島営農組合 組合長 岩本 隆夫さん(73歳)



城崎町の円山川右岸に位置する下島地区では、兵庫県・豊岡市等の行政やJA等関係機関の助言・指導を受け、「後世へ残そう、豊かな大地」をスローガンに、設立総会を開催し、組合員19名、農作業の受委託(耕うんから刈取りまでの各作業、乾燥調整、精米まで)を中心として、平成26年7月15日に下島営農組合が、発足しました。

その後、受託面積は、順調に増え、平成31年には近隣の結地区の農地13筆81aを受託し、現在では、下島・結の両地区で27筆184aの全作業を受託するようになり、組合員も23名になりました。

一方で、組合員の高齢化、後継者の育成、獣害の被害等、様々な課題もあるとのこと。今後は、

- ・地域全員で考え、担っていく農業
- ・困った時、気兼ねなく頼め、地域から遊休農地を出さない農業
- ・機械等の共同利用等により、低コスト化を目指す農業
- ・次世代の担い手を育成し、世代を超えて考える農業
- ・地域の文化と自然を守っていく農業

これらを目指し、頑張っていけるとのことです。

(農業委員 石橋 重利)